

奈良女大家政 ○磯田憲生 梁瀬度子, 京都教育大 榊原典子, 広島大教育 岩重博文
 新潟大教育 五十嵐由利子, 江南女短大 水野由美, 大阪青山短大 宮沢モリエ

目的 高齢者の住宅の温熱環境の実態を把握するために、九州地方など的高齢者を対象に、住宅の特性や住まい方などを調査すると共に、人体周囲気温、皮膚温、生活行動、暑さ寒さの感覚などを測定し、高齢者の住まい方や温熱環境の影響を検討した。ここでは、調査方法の概要と住まい方などを報告する。

方法 温熱環境の実態測定は、大分、広島、大阪、愛知、新潟の各地のそれぞれ5～10名の高齢者と住宅を対象に実施した。また、比較のため大学生も対象とした。住宅の特性や住まい方などは、住宅の構造、間取り、冷暖房器具、着衣・寝具の状況、器具の使用状況や窓の開閉などの住まい方、風通しや居心地などの居住性評価、健康などの身体状況についてヒアリング調査した。被験者の周囲気温および皮膚温（胸部、手部、足部）の測定は、熱電対および携帯用温度記憶装置を用いて5分間隔で24時間測定した。睡眠や家事などの生活行動、暑さ寒さや快適さの感覚は、睡眠時を除き測定期間中60分間隔で調査票に記入してもらった。着衣の種類や重さなどの着衣状況も調査した。

結果 夏暑く、冬でも温かい広島地方では、築後6～22年の木造住宅に加え、築後10年のRC造集合住宅が対象である。夏には風通しがよいが、扇風機やクーラーの使用が多い。冬にはこたつ、ストーブ、ファンヒーターなどが使用され、寝具にも電気毛布の使用が多い。積雪のある新潟地方では、木造2階建て、築後20年～30年の住宅が対象であり、夏には冷房器具は使われず、冬にはストーブや寝具に電気毛布が使用される。持病は高血圧が多い。